

市政 トピックス

特別展 The 100th Anniversary | Robots and the Arts - Humanoid Crossing boundaries

生誕100年 | ロボットと芸術 ~ 越境するヒューマノイド

📖 美術博物館 ☎ (35)2550 ※美術博物館公式ツイッター・フェイスブック、📱からもご確認いただけます

会期 7月18日(土)~9月13日(日)

開館時間 9時30分~17時 (入場:16時30分まで)

休館日 毎週月曜日 ※8月10日(月)は開館し、翌11日(火)が休館

観覧料 一般600(500)円、
 高大生400(300)円、
 中学生以下無料

※()内は10人以上の団体料金および前売券の料金。年間観覧券をお持ちの方は、一般300円、高大生200円で観覧可

展示会について

現代社会においてロボットは日常生活をはじめ、さまざまな場面において重要な役割を果たしています。今でこそ、当たり前のように使われている「ロボット」という言葉ですが、初めてそれが世の中に登場したのは、チェコの文学者カレル・チャペック(1890-1938)の戯曲『R.U.R.』(1920)においてでした。その語源は、チェコ語で「賦役(ふえき)=労働」を意味する「Robotla」であり、人間によく似た「人造人間」を指していました。「ロボット」という言葉の誕生100年を記念して開催する本展では、人間の探究心や夢、欲望など、時代の精神が仮託された人型のロボット「ヒューマノイド」に焦点を当てます。ロボットをモチーフとする作品とともに、実機や写真、映像資料など多彩な展示物を紹介し、人間と機械、そしてそれを取り巻く現代社会のあり方や、芸術とテクノロジーの可能性について考えます

第1幕 **ロボット黎明期** ~ヒューマノイドの誕生と受容~

チャペックの『R.U.R.』の発表後まもなく、日本ではさまざまな分野で活躍する文化人たちが反応をみせました。ここでは、北海道帝国大学(現・北海道大学)教授を退官後、1928年に東洋初の人型ロボット「學天則」を制作した西村眞琴(1883-1956)の関連資料をはじめ、「ロボット博士」と呼ばれた夕張出身の相澤次郎(1903-1996)が手掛けた、高さ2m20cmのガイドロボットなどを紹介します

相澤次郎《ガイドロボット「一郎」君》
 1959年 公益財団法人国際医療福祉教育財団蔵



第2幕 **変容するヒューマノイド** ~時代の象徴としての自動機械~

映画『メトロポリス』(1926)に登場する女性ロボット「マリア」のイメージをはじめ、ロボットという言葉が登場する前に製作された『人間タンク』(1919)など、人々を魅了してきたヒューマノイドのビジュアルイメージの一端を、伊藤隆介(1967-)の模型と映像の組み合わせによるビジュアル・インスタレーションや、津田光太郎(1993-)のロボットをモチーフとする絵画作品とあわせて紹介します



伊藤隆介《Realistic Virtuality(Flying Nobody)》2002年、
 《Realistic Virtuality(Backdrop)》2012年 作家蔵(撮影=小牧寿里) ※参考作品

第3幕 **機械×身体** ~美術史に見る想像と創造~

ここでは、20世紀の新興芸術運動に影響を受けた日本の芸術家たちの作品に垣間見られる機械的な身体像の特性や、戦後の芸術家たちの作品に見受けられる機械と身体をかけたイメージを紹介します。女性像の歩行の動きをリアルに再現した美術家・西尾康之(1967-)の動態展示も見どころの一つです



中村宏《観光独裁》1965年 青森県立美術館蔵

第4幕 **キャラクターとしてのロボット** ~大衆文化への浸透~

戦後、日本においてロボットは、漫画雑誌やテレビアニメなどの大衆メディアにおいてキャラクター化され普及していきました。ここでは、そうした大衆文化に対するロボットイメージの浸透について、ウルトラ怪獣のデザインでも知られる彫刻家・成田亨(1929-2002)の原画作品をはじめ、プラモデルのパーツを素材とする大森記詩(1990-)の彫刻作品、そして、その浸透に大きな役割を果たしたロボットの玩具などを紹介します



成田亨《キングジョー初稿》
 1967年 青森県立美術館蔵

第5幕 **拡張するテクノロジー** ~ロボティクスの現在~

近年、ロボット技術の発展は著しいものがあり、AI(人工知能)への関心の高まりなどと相まって身近な存在になってきています。ここでは、現在進行中のロボット工学や、近年脚光を浴びているAI(人工知能)の展開について、北海道大学情報科学研究院の研究や、ポーカロイド「初音ミク」のイラストやライブ映像などとあわせて紹介します



「ロボビー」2010年 北海道大学大学院情報科学研究院ヒューマンコンピュータインタラクション研究室蔵